

## (2) 各学系の研究

---

### ① 学校教育学系

#### ア 研究の特色

学校教育学系は、教育学、教育実践研究を中核とする本学の教育・研究、教職必修科目の基盤領域を形成する。全学的な教職必修科目を担当する教員が多い中で、学内において多人数講義を担いながら、多くの教員が、国・地方自治体、地域社会、学校等に至る、全国の教員研修の講師、学会等の研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員は、学部生・大学院生の指導や地域の学校に対する支援活動を行うとともに、全国の研究会講師や実践研究の取組をリードしている。また、連合博士課程においては、学校教育方法連合講座、先端課題実践開発連合講座を中心に、各講座で活発な教育研究活動を推進している。

#### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は、修士課程と専門職学位課程の教員による、多方面での教育・研究、学会における研究発表と論文の投稿、著書の発行、学外においては、国・地方自治体、地域社会、学校等に至る、数多くの研修会の講師や公開講座、出前講座の講師等で成果を挙げている。

本学系教員による学内研究プロジェクトは、新規分（特別研究）として「発達支援体制をもつ幼保小接続プログラムの開発に関する実践的研究」、「大学における教育経営職育成の国際共同開発」の2件、新規分（一般研究）として「ICTを活用したアクティブ・ラーニング型講義への移行・適応プログラムの開発」、「附属幼稚園の預かり保育についてのプロジェクト評価研究」の2件、新規分（若手研究）として「キャリア教育の視点を取り入れたワークショップ型授業におけるアイデンティティの発達支援に関する基礎的研究」1件が採択された。

このほか継続分（一般研究）として、「理科に対する苦手意識克服のための教師育成に関する研究－野外観察におけるICTの活用－」、「体育科学習におけるICTを活用したアクティブ・ラーニングデザインの開発」、「「グローバルキャリア教育」を基軸にしたアクティブラーニングの開発－国際交流インストラクター事業を中心に－」、「学際型いじめ防止プログラムの開発に関する実践的研究」の4件がある。

## ② 臨床・健康教育学系

### ア 研究の特色

本学系では、臨床心理学に基づいたいじめ、不登校、ひきこもり、発達障害、児童虐待、PTSDなどのこころの問題の解決に向けた研究、特別支援教育の基礎理論、各種障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、情緒障害、言語障害、重複障害、発達障害）の心理・生理学、診断法、指導法に関する研究、学校健康教育学、医科学、養護学等に基づいた学校における健康教育に関する研究が行われている。心理教育相談室、特別支援教育実践研究センターをはじめとする臨床研究の場において、いずれのコース・科目群も学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を展開している。

### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、心理教育相談室、特別支援教育実践研究センター及び地域の学校等において多様な臨床研究が展開されており、これらの成果は、関連学会や大学紀要の他、『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』においても公表されている。また、学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も盛んに行われている。

このような研究活動の一環として、今年度は次の4件の学内研究プロジェクトが実施された。

- ・自己評価システムを用いた教師のメンタルヘルス支援プログラムの効果検証
- ・特別な支援が必要な子どもの教科指導推進のための教員養成プログラム検討に関する基礎的研究
- ・小・中学校通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒のアクティブ・ラーニングを支える自立活動のカリキュラム開発に関する基礎的研究
- ・特別な教育的ニーズのある児童を含む小集団活動場面を活用した学習支援方法の開発

このように、本学系の構成員は、それぞれの領域の専門性を活かして、学内のみならず地域においても活発に研究活動を継続している。臨床心理学コースにおける公認心理師及び臨床心理士の資格取得に向けた対応や、特別支援教育コースにおける6年一貫プログラムの策定・実施、学校ヘルスケア科目群における保健管理センターとの連携強化など、本学系の特色を活かした教育・研究活動の更なる発展が期待されており、それらの実現に向けた教員スタッフの充実が急務となっている。

### ③ 人文・社会教育学系

#### ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、活発な活動がなされている。

#### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系の教員による研究プロジェクトとして、前年度採択の「教科内容・教科教育・教育実践を横断したPCK研究による教師の専門職的力量的構造解明」の1件が、本年度も引き続き継続して行われた。また若手研究として「英語リーディングテストの構成概念と教育実践への応用に関する研究」が、新たに採択された。科学研究費補助金については、継続・新規分として、「基盤研究(B)」2件、基盤研究(C)」8件、「研究活動支援スタート」1件が交付された。

なお、本学系の研究領域に関する上記の3学会については、研究活動が次のように展開されている。

「上越教育大学国語教育学会」：昭和58年7月に設立。国語科教育及び国語学、国文学、書写・書道の研究を深め、会員相互の親睦を図ることを目的とする。機関誌『上越教育大学国語研究』、学会報『上越教育大学国語教育学会報』を刊行し、例会を年2回開催する。6月の例会は卒業生・修了生による研究発表、2月の例会は卒業・修了年度の在学生による研究発表が中心だが、それぞれ教員の研究発表も加わる。

「上越英語教育学会 (The Joetsu Association of English Language Education)」：平成9年9月に設立。英語科教育、英語学・言語学、異文化コミュニケーション、英米文学の研究を深めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とし、研究発表会等の研究活動を促進する事業、会員間の情報交換及び親睦を促進する事業等を行っている。毎年7月に年次大会を開催し、機関誌『上越英語研究』を刊行する。

「上越教育大学社会科教育学会」：昭和61年3月に設立。会員の分布は北海道から九州、沖縄まで全国に及ぶ。月例会で地域巡検を実施するほか、毎年1回、研究大会を開催する。学会報の『上越教育大学社会科教育学会だより』を発行するほか、機関誌『上越社会研究』を刊行する。

今後の検討課題としては、本学系に属する主な研究領域において、漢文学、古典文学、英文学、社会学、哲学、倫理学専攻の教員が不足していることが挙げられ、補充が望まれる。

#### ④ 自然・生活教育学系

##### ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、技術、家庭科の4つの専門分野の教員によって構成されている。

数学の分野では、7月31日に「数学教室修士会」と称して数学並びに数学教育の講演会を開催し、数学教室教員ならびに大学院学生の研修を行った。また、「上越数学教育研究」32号を刊行し、教員ならびに大学院修了院生等の研究論文を掲載した。継続して算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。

理科の分野では、「超短パルスレーザーを用いた固体の超高速分光の研究」、「主として電波による星間物質の観測に基づいた銀河と星の形成と進化の研究」、「植物の環境応答特性や生活史特性に関する研究」、「鳥類の社会行動及び個体群構造に関する研究」などの専門研究を行うとともに、物理学、化学、生物学、地学の専門家が「それぞれの分野における教材開発」などを行うなど、専門性を背景とした教材研究を行っている。さらに、生物学の専門家が「生物教育における教材化に関する研究」、理科教育の専門家は「仮説設定の方法論」など、理科教育の現代的課題にも取り組んでいる。また、物理学、化学、生物学、地学の専門家と理科教育の専門家が協力して、「思考力の育成」に関する論考を行った。

技術の分野では、メカトロニクス教材の開発を中心としたエネルギー変換技術の研究や、情報ネットワークやICTに関する技術、特に、学外活動として小・中学生を対象にプログラミングの学習指導・実践も行っており、学校現場の課題に対応した取組も積極的に行っている。また、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。平成28年度は、日本産業技術教育学会が主催する、小・中・高校生を対象とした「第19回技術教育創造の世界『エネルギー利用』技術作品コンテスト」を本学で担当し、全国から多くの作品の応募があった。

家庭科の分野では、家庭科所属の教授が実行委員長となり、平成28年7月に「第59回日本家庭科教育学会」を、新潟市朱鷺メッセ会場において開催した。昨年度に日本教育新聞社とともに構築した「教員養成課程における食育活動モデル」を実践活動として展開し、そのいくつかについては日本教育新聞、朝日新聞等にも掲載された。地域貢献事業としては「地域素材を授業にいかすためのワークショップ」のテーマのもと、数回のワークショップを実施した。「生活と技術を考える家庭科」と題したワークショップにおいては、「AERA日本を突破する100人」等にも選ばれているオリィ研究所・吉藤健太郎氏を招聘し、ロボットとの生活の可能性について考えた。また、燕市より富貴堂の2代目・藤井宏氏、息子の健氏を招聘し、工芸品「燕鎚起（ついき）銅器」の伝統技法である「鍛金（たんきん）」についての講習を受けた。さらに、昨年度に開設した学部「体験学習」選択体験コース「トマト×くらす」については、内容を発展させながら継続して取り組んだ。

##### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系に所属する教員の研究業績の中には、以下に記すように平成28年度に国際誌へ採録された論文が多数あり、国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特筆すべきことである。

1. 「C\*-algebras associated with Hilbert C\*-quad modules of C\*-textile dynamical systems」  
Journal of Mathematical Analysis and its applications 438 (2016), No. 2, 578/628.
2. 「On flow equivalence of one-sided topological Markov shifts」 Proceedings of American Mathematical Society 144 (2016), No. 7, 2923/2937.

3. 「Continuous orbit equivalence of topological Markov shifts and dynamical zeta functions (with Hiroki Matui)」 *Ergodic Theory and Dynamical Systems* 36 (2016), No. 5, 1557/1581.
4. 「Continuous orbit equivalence, flow equivalence of Markov shifts and circle actions on Cuntz--Krieger algebras」 *Mathematische Zeitschrift* (2016), 285(2017), 121/141
5. 「Uniformly continuous orbit equivalence of Markov shifts and gauge actions on Cuntz--Krieger algebras」 *Proceedings of American Mathematical Society* 145 (2017), No. 7, 1131/1140

委員会や書類作成等々で業務が多忙化するなか、学術研究の成果を発信し続けられる研究環境をいかに創出していくかが今後の大きな課題である。

## ⑤ 芸術・体育教育学系

### ア 研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は、声楽、器楽、作曲、音楽学、音楽教育学、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術教育学、体育学、運動学、学校保健学、体育科教育学といった音楽、美術、保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技審判等を務めることも多い。平成28年度も音楽、美術では各教員の専門を生かした地域貢献活動が進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。

### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度に実施あるいは参画した研究プロジェクトとしては、「身体の浸水が非浸水部位の神経調節に及ぼす影響」（研究代表者：松浦亮太）、「バソプレシンが精神活動のパフォーマンスに与える影響」（代表者：池川茂樹）、平成27～29年度兵庫教育大学連合大学院共同研究プロジェクト「包括的健康教育プログラム構築に向けての国際学術研究－生命科学，行動科学，情動科学の複合領域の視点によるアプローチ」（代表者：鬼頭英明，プロジェクト協力者：池川茂樹ほか）、「特別支援が必要な子どもの教科指導推進のための教員養成プログラム検討に関する基礎的研究」（代表者：笠原芳隆，分担者：藤井和子，土田了輔，佐藤ゆかり，弓場ひかり，小黒千穂，太田文哉，佐藤杏香，千葉悠加，鴨井理恵，長谷川 哲）、「体育科学習におけるICTを活用したアクティブ・ラーニングデザインの開発」（表者：水落芳明，分担者：土田了輔）兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科 共同研究プロジェクト、「管打合奏における基礎トレーニング教材の分析と使用法」（研究代表者：長谷川正規）、「国際交流作品展を軸とした本学の美術教育研究の発信と相互交流」（研究代表者：高石次郎，分担者：阿部靖子，洞谷亜里佐，安部 泰，五十嵐史帆，伊藤将和，松尾大介）、「教科教育カリキュラム構想のための基礎的研究－『21世紀を生き抜くための能力』の『思考力』と教科固有の見方・考え方の観点から－」（研究代表者：小林辰至 分担者：時得紀子 尾崎祐司 阿部靖子 五十嵐史帆 土田了輔 周東和好）が挙げられる。

また、科学研究費採択については、「疲労困憊後の筋力と動機づけの関係」（研究代表者：松浦亮太），H27～28年度科学研究費助成事業（若手B）「5-アミノレブリン酸が運動時の熱放散能に及ぼす効果」（代表者：池川茂樹）、「創作ダンスの授業の問題点とその原理的解明－協働学習のモデル領域を目指して－」（研究代表者：大橋奈希左）平成28年度最終年、「ボールゲーム指導における学習内容の開発研究」（代表：土田了輔）、「小学校中学年「ものづくり」教材の開発－アートとテクノロジーの融合を目指して」（研究代表者：阿部靖子，分担者：安部泰）に交付がなされ、学系所属の教員により活発に研究が進められた。